

農專業経営になった。

二十 結び

昭和三十六年、偶然に満州から引き揚げた女房と縁があつて結婚して、男の子を四人授かった。

日本の農業も機械化されて、人力に頼る時代は終わった。健康な肉体と健全な精神を培つてやろうと始めさせた剣道が、四人で合わせて二十段の目標が、長男の嫁や孫を合わせると三十段を突破した。

長男信行が大学卒業後、後継者となつて、我が家も三代目七十八年の歴史を刻んだ。

母を平成三（一九九一）年に八十四歳で、父を平成六年に九十二歳で見送つた。日本の国民も食べ過ぎで糖尿病が増えたなんて、とんでもない時代がきたものだ。僕が七十五歳、女房が七十一歳、まあまあ元気です。これからは健康に気を付けて、平和に感謝しながら生きていきたいと思ひます。

鳥になつて日本に帰りたい

千葉県 水野 幸子

一 八月九日の羅津

「ウー ウー ウー……」昭和二十（一九四五）年八月九日午前零時五分、途切れ途切れにけたたましく鳴るサイレンの音、初めて羅津に空襲警報が発令された。六月ごろから羅津湾に機雷投下のため、夜半になるとアメリカの爆撃機が姿を見せ始め、三分間連続吹鳴の警戒警報を知らせるサイレンが鳴り響いていた。飛来は次第に間隔を縮め、八月には夜ごととなつていたが、突然の空襲警報の発令は、羅津に住む人々を震撼させたのであつた。驚いた私の家族は、慌てて防空壕に飛び込み、練習を重ねていた通りに目と耳を指で押さえ、背を丸くしてかがみ込んだ。港の方角では「ドカーン、ドカーン」と轟音があがっていた。また、高射砲から発射される砲弾の炸裂音はすさまじく、

時々「ズシン」と突き上げられるような地響きが、体全体に伝わってきた。程なくして、小型爆撃機が羅津の町の上空に現れ、無数の照明弾を落とす。辺り一面真昼のように明るくなると、機銃掃射を浴びせてきた。傍若無人に撃っていた飛行機も、しばらくして私たちの頭上から去って行ったが、幸いなことに人命にかかわる被害はなかった。

父と弟は、早速外に出て港の上空を見ていたが、火を噴いて落ちていく飛行機を見て、「やったぞ！命中だ」と叫んでいた。私も恐る恐る外に出て、敵機の落ちていくのを見て喜んだ。敵とはいえ、今尊い命が消えていくことへの心の痛みなど、全く感じてはいなかった。戦争は一時的であれ、人の心を冷たく変えるものである。この爆撃機に乗っていたのはソ連軍の兵士で、軍服のポケットに、ウラジオストツクから羅津へと赤線が引かれた地図が入っていたとか。これを見た日本軍は、初めてソ連の参戦を知ったが、住民たちには知らせなかった。明け方になって、ようやく黒い編隊は北

の空に帰って行ったが、港ではひっきりなしに爆発音が続いていて、人々は呆然^{ぼうぜん}としてなす術もなく地面に座り込んでいた。この日、港の倉庫にはたくさんのお金が貯蔵されており、また近くに停車していた貨車十両にも、爆薬が満載されていた。爆撃機が去ってからも、これらが次々と爆発、夜明けの空を黒く焦がしていた。

二 松山に避難

隣組の組長さんが、「皆さん、艦砲射撃があるかもしれません。食べ物を用意して、逃げられる態勢でいて下さい」と、メガホンでふれ回っていた。父は早速、会社の様子を気遣って出掛けて行ったが、ほどなく戻って来て、「会社は無事だったが、満鉄の社員は青紙召集（非常召集のこと）で、これからすぐに入隊しなければならぬ。社宅の人たちはまとまって行動すると言っているが、お母さんと幸子たちは隣組の皆さんと一緒に行動しなさい。組長さんをお願いして行くから、幸子も務もお母さんから離れないように」と言って、

奉公袋を持って再び足早に出掛けて行った。

私の家族は、満州の開原から昭和十八年に羅津に転居した。社宅は学校に遠いことを気遣った父は、旭町にある元特務機関の方が住んでいたという一軒家を、代用社宅にもらって住んでいた。このため、満鉄の方々と一緒に行動することはできなかつたのである。

母は早速米を研ぎ、おにぎりを作った。私と弟は教科書をリュックサックに入れたが、母は「また帰ってくれば勉強はできるのだから、食べ物や着る物を入れなさい」と言った。しかし、結局は二度とこの家に帰ることはなかつたのである。

間もなく組長さんが来てくれて、「お父さんがいないんだから、幸ちゃん、お母さんを助けて頑張るんだよ」とやさしく言って帰って行った。しばらくして、遠くの方から組長さんのメガホンの声が聞こえてきた。「集合！ 集合して下さあーい。通りに出て下さあーい」組長さんは背に大きなリュックサックを背負い、鉄兜をかぶって走っ

ていた。母も私ももんべをはき、弟にも厚く綿の入った防空頭巾を肩に掛けさせた。飛び出すように集まった隣組の人たちは、皆一様に不安と緊張で青ざめていた。「艦砲射撃を避けるための一時避難」と思っていた人たちは、組長さんを先頭に松山に向かった。

途中、小高い山の中腹まで来たとき、皆の足は突然止まった。そこで目に入ったのは、凄惨な港の姿であった。私たちは「あつ、あれ、あれは……」と、言葉にならず息をのんだ。港の入口にある大草島、小草島を背にして大小の船舶が、船首や船尾を空に向けて、もくもくと煙を出して沈没していた。康子ちゃんと花摘みに来て二人の水兵と出会い、共に語り共に眺めやった、あの美しい港の姿はどこにもなかつた。しばし呆然と立ちつくした一団は、我に返って歩き出した。

やがて女学校の近くにある満鉄の「ひばりが丘の社宅」が見えてきた。ほとんどの社宅は埠頭の近くにあったが、ここには小学校に通う子を持つ

世帯が多く入居していた。松山に隠れたものの、夜になっても艦砲射撃は起りそうにもなく、ラジオの放送も聴けず、不安なときを過ごしていた隣組の人たちは、とにかく羅津の町が見える所まで引き返すことにした。小高い山の上に立って羅津の町を見下ろしたが、町のあちこちに火の手が揚がっていた。もう我が家には戻れないと思い、楽しかった日々の思い出が蘇って涙が止まらなくなった。

その夜は、ここで野宿と決まり、明るくなると、皆一様に帰宅を願った。組長さんと会長さんの二人が町の様子を見に行ったが、程なく帰って来て、「ロスケが上陸していて、自動小銃を向けられ危ないところだった。家に帰れる状況ではないので、一刻も早く逃げましょう」と言った。疲れて動けそうにもなかった人々も慌ててリュックサックを背負って、再び松山に逃げ込んだのである。既に何組かのグループが避難しており、グループのほとんどが隣組で組織されていた。各世話役が集ま

って相談した結果、満鉄のひばりが丘の人たちは会寧から満州に行くと言う。私たちの組長さんは言った。「満州はこれから寒くなるので、着のみのままの今の状態では無理です。南下して、船に乗れば日本に帰れます。力を合わせて日本に帰りましょう」

三 我が家を捨て南朝鮮に向かう

南朝鮮に向かうことになって、いよいよ羅津の地を離れることが確実となった。この現実に直面し、私は淋しき、悲しきが交錯した。また不安も大きかった。このとき母は、亡くなった弟功の位牌と母が貯めた五千円と七千円の二通の通帳や、多くの債券を背負っていた。大切に日本に持ち帰ったが、これらは全部反故になってしまった。父も、地位も財産もすべて失った。満鉄の社債や社員預金などは、幻のごとく消えてしまったのである。南下すると決まって、团长となった組長さんは力強く言った。「皆さん、これからは野宿を覚悟して下さい。団結して、皆で助け合って日本に

帰りましょう」

竹前さん親子五人、町会長夫婦二人、豆腐店の老夫婦二人、日本人妻一人、団長夫妻と幼児の三人、団長の義妹一人、私の家族三人の十七人が行動を共にすることとなった。早速、ひばりが丘の空き家から鍋やかんなどをもらって来て、分担して持った。途中共同炊飯するが、米や野菜は何とか調達できるだろうと話し合っ出て出発した。この日から歩き続けて、足には豆ができ腫れあがったが、それでも歩くことを止めるわけにはいかなかった。空き家があれば転がって眠り、米があれば雑炊を作り、荒れた畑に野菜があればこれを食べて命をつないだ。雨続きで泥まみれの行進は続き、「日本へ帰る」の一心で薄汚くなった一団は、ふらつく足を踏みしめながら歩いた。しかし、次第に遅くもなっていくた。

山の斜面すれすれに飛ぶ小型爆撃機から爆弾が投下され、白煙が上がっているのを遠くに見ながら、行進は続いていた。ある日のこと、足を止め

てこれを見ていた幾組かのグループを目がけて突然一機飛来し、逃げまどう避難民に機銃掃射をあびせてきた。私の近くに大木があり、そこに伏せたが、雨が降るように弾が落下した。このとき逃げ場の無い人たちは死に、同級生の嘉代ちゃんのお兄さんも死んだ。そしてこの日を最後に、嘉代ちゃんの情報も途絶えてしまったのである。

相変わらず道はぬかるみ、汗と泥にまみれての逃避行は続いたが、団長の富沢さんはすべてに心を配り励ましてくれた。それぞれ違った生活をしてきた人たちも、このころになると一つの家族のようになつて心を開いていた。

四 朝鮮人はまだ親切だった

無秩序となつて各地で暴動が起こり、略奪で商店や倉庫も荒らされ、はげ鷹に襲われたように根こそぎ持ち去られて、食糧の調達が難しくなつた。ある日、近づいて来た朝鮮人の男が「あの倉庫にはまだたくさんのお米があるよ」と教えてくれた。その行為に私たちは涙した。また、ある農家の庭

先で休ませてもらっていたときのこと、この家の主人が尋ねた。「どうしてあんなに逃げることするよ」と言った。ソ連兵は朝鮮人だって怖い。なぜ日本人だけ逃げるのか、不思議に思えたのである。まだこのころは、一般には日本人を侵略者とする意識はなく、親切であった。

野宿が続いた日の夜、団長さんの義妹さんが出産したが、生まれてきたその児はすぐに死んだ。みんな悲しく、つらい夜を過ごした。義妹さんは乳腺炎になって、飲む乳もない乳を、涙を流しながらもみ出していた。その乳は赤く染まっていた。

二日ほどの休養で出発。義妹さんは必死で付いて来た。「城津に行けば、船が出る」と伝え聞いて、避難民は城津へ向かって歩き続けた。豆腐店の老夫婦が、「もう歩けない」と道に座ってしまった。皆で励まし荷物を分けて持ち、人家のある所までたどり着いた。農家の主人は困惑の面持ちであったが、その夜の泊まりを承知してくれ、朝

鮮漬けを鉢に入れて湯と共に持って来て「日本人困ったなあ、これ食べるといいよ」と、ねぎらってくれた。みるみるうちに皆の顔が歪んできて、嗚咽に変わった。気が付くと、家を出てから一カ月が過ぎていた。車もなく牛馬にも乗れず、歩き続けたのであった。

五 悲しい別れ

翌朝、この家に心ならずも豆腐店の老夫婦を残して出発することになったと、団長さんが沈んだ声で皆に伝えた。老夫婦は「もうこれ以上歩けば死んでしまう。金が無くなるまでここで世話になる」と懇願したと言う。皆手を振って、「早く追いついて下さい」と涙で別れた。

ふらふら歩いていると、「あつ、だれかが倒れている」と叫んだ人がいた。見ると、道の真ん中に女の人が倒れていた。声を掛けても返事がない。もんぺをはいた女の人は、既に息絶えていて、その懐には冷たくなった幼児がいた。女性の体には温もりがあった。恐らく、死んだ我が子を抱いて

歩いていたに違いない。私たちは、泣きながら母子を道路脇の木陰に寝かせて、合掌して去った。

相変わらず、ソ連軍の爆撃機が山の中腹目かけて爆弾を投下していた。八月十五日の日本降伏を知ってか知らずか、日本兵は戦い続けていた。父もこの中にいた。後に父から聞いた話であるが、終戦を知っても、玉砕を覚悟の上官は抵抗を続けたそうである。

六 鳥になって日本に帰りたい

城津に行けば船も出るし、列車もピストン輸送していると聞き、夜も仮眠して歩いた。「あつ、務がない」私が振り向くと、後を歩いているはずの弟の姿がない。私はさつと血の気が引き、胸はドキドキと鼓動し、足はガクガクと震えた。

「お母さん大変！ 務がないの」皆の足がピタッと止まった。これまでの道中で目のあたりにした光景が、それぞれの脳裏をかすめた。迷い子か、捨て子か、道端で泣き叫び一歩も動こうとしなかった幼子。母は驚きのあまり顔はひきつり、蒼白

となった。団長さんが私の手を取り、「さあ、おじさんと捜しに行こう。お母さんはここで待っていて下さい」と言った。私と団長さんは、もと来た道を一目散に引き返したのであるが、行けども行けども務の姿はなく、途中出会う団体に聞いても、それらしい男の子は見掛けないと言う。しばらくの間、途切れていた団体がやって来た。中年の男性が引率しているようだが、女、子供が多く、足を引きずりながら歩いていた。団長が「つばを取った戦闘帽をかぶった（途中でもらった戦闘帽は、つばがあると戦闘の意思があると見られるという配慮からつばを取っていた）小学生を見掛けませんでしたか？」と尋ねると、「ああ、いましたよ。この先の二股道に立っていました。一緒に行くと言っても、ここで待つと言って動きませんでしたよ」団長らしき人が、興奮気味に言った。「早く行ってあげてください」と女性の声。涙でくしゃくしゃになった顔で礼を言い、私は団長と走り出した。今この瞬間にも、どこかに行っ

まうのではないかと不安がつのも、涙をこらえて必死に走った。

二股道に弟がうずくまっていた。「トームー、トムちゃん」「おねえちゃん、おねえちゃん」弟は弾かれたように走り寄り、私に飛び付いた。二人は地面に転がって、「ワァー、ワァー」声をあげて泣いた。疲れてふらふら歩いていたが、いつの間にか遅れ、後続の団体に混じって歩いていた。二股道に来て、その人たちは二手に別れてしまった。このとき、二手に別れたことが、弟にとつて幸いであつた。二組の団体が違う道を共に選んでいたら、恐らくそのまま付いて行つて、私たちとは会えなかつたに違いない。そのとき、弟は迷つたが、どっちの道にお母さんたち行つたんだろう。違つた道に僕が行つたら、もう会えなくなる、ここで待っていたら、きっと迎えに来てくれるだろうと考へて、健気にも十歳の弟は信じて動かず、自分の運命を自分で決めたのだつた。弟は、泣きじゃくりながら団長に手をひかれ、心配して待つ

ていてくれる皆の所へ歸つた。「良かったね、良かった」と先を急ぐ道中にもかかわらず、どの人も涙ぐみ、心から喜んでくれた。団長は、やさしくこの様子を見ていた。母はうわごとのように、「ありがとうございました。ご迷惑をお掛けして申し訳ありません」と繰り返した。突然、母は体から細紐を抜き取り、その端をもんべの紐に括り付け、そのまた一方の端を弟の首に巻き付けた。手をひいて歩くわけにはいかなかった。片手には鍋があり、空いた片手は重いリュックサックを支えなければならなかつた。母が歩き、弟が歩いて、私が歩く。団長を先頭に弱い者を真ん中にして、ふらつく足に鞭打ちながら行進は続いた。行く手の空に鳥が一羽、また一羽と集まり、群れをなして東の空に飛んで行つた。私は鳥になつて日本に歸りたかつた。

七 敗戦を知る

城津が近付いてきたが、日本の国旗の日の丸の四隅に、字らしきものが書かれた旗が軒先に揚げ

られていた。後に知ったが韓国国旗であった。不安な心で村に入ったが、人々の目は冷たく、敵意に満ちていた。「早く行け！ 早く行け！」と追いついた。保安隊の腕章を巻いた青年たちが、日本人の元軍人や警察官を捜して検挙していた。保安隊は、この混乱時直ちに組織された朝鮮人による警察組織であった。「お前たち侵略者は、戦争に負けたんだ。朝鮮は独立するぞ」と、保安隊員が居丈高に言った。八月十五日の終戦を知らずに、一カ月以上も野山を逃げ回っていたのである。足止めされて殺されると思い、皆一様に怯えていた。保安隊が近づいて来て、リュックサックの中を調べ始めた。何と驚いたことに、彼らは目ぼしいものがあると、平然とポケットに納めた。「日本は負けた。神風は吹かなかつた。これからどうなるんだろう」涙も出ない。虚脱状態でうずくまっていた。「さあ、早くこの村を出なさい」保安隊の青年が言った。何のことはない。荷物の点検と称して、目ぼしいものを取り上げるのが目的であつた。

歩き始めたが、「戦争に勝つ」を信念に張り詰めていた心に穴が開き、だれもが元気をなくしていた。日本はどうなっているのだろう。帰れるのかしら。皆だれもが思っていたが、口にすることを恐れていた。次第に避難民が増え、その行列は城津に向かって長く続いた。ソ連軍が隣の町まで来ていると聞いて、必死に歩いていた。

八 ソ連軍の狙撃

一晩中歩き続けて、やっと城津駅が見えてきた。駅は避難民であふれ、子供たちは泣き叫び、大人たちは怒声をあげていた。城津駅は、興奮の垣塙かきと化していた。機関車が、丸太で柵をした無蓋貨車を引いてノロノロとホームに入つて来ると、人々は「ワァーッ」とどよめき、先を争つてなだれ込むように乗車した。団長さんは全員に手を差し延べ乗せてくれたが、乗れない人も多く、ホームにうずくまっていた。気の毒だが、どうすることもできなかつた。

汽車は徐々にスピードをあげ、これで日本に帰ることができるかと安どした。そのとき、「ドスーン」と鈍くしかも大きな音がして、人々は反射的に目と耳を塞ぎ、背を丸くした。汽車が猛スピードで鉄橋にさしかかったとき、「ドカーン」さらに大きな音がして、車両は「ガタガタ」と揺れ、振り落とされそうになった。「ガターン」と大きな音と共に汽車は停止した。人々の「大変だ」「おしまいだ」の声を聞いて首をもたげると、辺り一面白い煙が漂い、焦臭かった。煙が薄れてから河原に目をやると、戦車が銃口を貨車に向けて並んでいた。

保安隊が乗り込み、まず軍人を下車させた。私の乗っていた車両は半分橋にかかり、脱線していた。軍人の次に「全員河原におりろ」の命令で、私たちは皆銃殺を覚悟して車から離れたのである。一発目の「ドスーン」の音は空砲で威嚇したが、止まらないので次に実砲を発射したらしい。運転士が血だらけで、戸板で担がれて来た。自動小銃

を首にかけた兵隊が、身体検査を始め、終わると、緊張して身を寄せ合う日本人の周りをうろつき始めた。腕時計が欲しかったのである。

それから、城津小学校に移されることになって出発した。私が戦車の前を通ると、そこに数人の兵隊がおり、一人の将校が私に近づいて来て、何か言いながら笑顔で頭を撫でた。ほかの兵士も、ここにこ笑って手を振っていた。私もいつしかにっこり笑っていたが、学校に着くと団長の富沢さんが「女の子は、ソ連兵の前で笑ったりしてはいけないよ。怖いんだよ」といつにない厳しさで言った。しかしそのときの私は、団長さんの心配している本当の理由を理解できなかった。間もなく知ることになるのだが。

九 粗暴なソ連兵

城津小学校の講堂に収容されたが、次々と保安隊やソ連兵が来て、目ぼしいものを奪って行った。特にソ連兵は腕時計を欲しがった。ソ連兵の多くは手の甲に刺青があり、ドイツで戦った四人部隊

が来ているのではないかとささやく人もいた。彼らが「シェーキ、ニヤート」と言ったのを、「使役」と思った男性たちは驚いた。実際は「時計はないか」ということであつたようだ。

この講堂で、私の家族は八月九日青紙召集で別れた父と、奇蹟とも思える邂逅かいこうを果たした。父はソ連軍と戦っていたが、武装解除された後、朝鮮服に着替え、南に行く列車に乗った。学校の講堂に、北からの避難民がいると聞いて訪ねて来たのである。共に家を出た家族も離ればなれになるという混乱のときに、広い朝鮮の地で出会えたことは幸運であつた。

最初品物を漁っていたソ連兵は、次第にエスカレートして、女性を襲うようになった。「キャー」講堂の真ん中で、女性の声が出た。「見ちゃ駄目」母は、私と弟を両手に抱えてかがみ込んだ。日本人の大勢いる所で、三、四人の兵士が強姦しているのである。女性の泣き声、けだものたちの淫らな声、笑い声。したい放題の挙げ句、ソ連兵は帰

って行つた。日本人は銃を突き付けられ、なす術がなかったのである。私は早速黒髪を切られ丸坊主になつて、国民服を着せられた。

三日後ふと気付くと、一人のソ連兵が立ち止まつて、じつと私を見ていた。驚いて慌てて目をそらしたが、そのソ連兵はつかつかと歩み寄り、あつと言ふ間もなくズボンの上から股間へと手をすべらせたのであつた。彼の手に触れるものはなかつた。私は、歯をくいしばつて頭を激しく振つた。そのソ連兵は、いつも現れているソ連兵とは服装が違い、腰に短剣をさげていた。私の顔をしばらく見ていたが、軍靴を鳴らして去つて行つた。男の姿をしているが、女ではないかと疑つての行動であつたようだ。それからはなるべく壁に向かつて座り、ソ連兵の目に触れないようにしていたが、つらい毎日であつた。

それから十日ほどが過ぎたころ、突然保安隊員が現れ、「威興に行きなさい。夕方汽車が出るから城津駅に行つて待ちなさい」と命令した。私と

母は灰で顔を汚し、男らしく歩くよう父に言われた。その夜は、駅舎には入れず駅前夜を明かすことになった。予想通り、幾度もソ連兵がジープで女性を連れに来た。保安隊員もたびたび来ては、荷物の中から気に入ったもの、高価なものを持ち去った。ソ連兵が来ると、父は私と母を背を丸くしてかがませ、その上に布を掛け、弟と父がそこに座ってカモフラージュしたので、懐中電灯で照らされても発見されず難を逃れたのであった。

十 朝鮮人の苦悩

午前十時を回ったころ、箱形の貨物列車が入って来て、荷物を積み込むように押し込まれ、扉は外から閉められた。小窓からわずかの光が差し込み、人の顔もはっきり見えなかった。昨夜はほとんど眠っていないので、皆早速居眠りを始めた。三十分ぐらい走った所で急停車したが、外で複数の人たちの甲高い声がしていた。扉が「ガラガラ」と開き、一人の身なりの良い朝鮮の男が、足を掛けて登って来た。私たちに向かって大声で演説を

始めたのである。「みんな、よく聞きなさい。日本はこの戦争で負けたんだ。これまで長い年月、日本は朝鮮を侵略し、あらゆる手段で朝鮮人を虐待してきた。日本人たちは朝鮮人の犠牲のもとに財をなしたんだ。我々民族を苦しめ、貧困に追いやったのはお前たちなのだ。今、我々は立ち上がって、この手で国を守る。お前たちのしてきたことを、よくよく考えろ」演説は延々と続き、次第に興奮してきて、体が小刻みに震えるのが見えた。疲れて居眠りをしている人を見て、「何事だ」と怒った。子供を泣かせまいと、母親は必死であった。「よく分かったから、もういいでしょう。私たちは昨夜一睡もできないで疲れている。どうか分かってほしい」と、近くにいた父が懇願した。「お前たちは戦争に負けたんだぞ。一人前に口をきくんじゃない。殺されたって文句の言える立場じゃない」とその朝鮮人は言って、やにわに父に殴りかかってきた。蹴る、殴るを繰り返した。父は無抵抗で頭をかかえて座っていたが、その朝鮮

人は全く軌道を逸しているかに見えた。「止めてっ！ 止めてっ！」と私は夢中で叫んで、父がばつとかぶさつた。そして、恐ろしさも忘れてその人を見上げた。その人は、瞬間私が女であることに驚いたのであるうか、あるいは親の上の子がかぶさつたことで心に動揺が起こったのであるうか、ぶるぶると震える拳を、私には振り下ろさなかつた。手をあげたまま目を吊り上げて睨んでいたが、次第に高ぶりも治まって、手を下ろし優しい目になって私を見ていた。すべてが止まったかのような沈黙の後、「よく考えることだな」とつぶやくように弱々しく言って去って行った。「黙っていれば良かったんだ」と言う男の利己的な声があった。恐らくこの人には、知識人であろう今の朝鮮人が、あれほどまでに取り乱したその心の痛みなど、かけらほどにも理解できなかったに違いない。また、この貨車に乗っていた日本人の中に

「明治四十三（一九一〇）年の日韓併合によって、韓国は消滅され、その抑圧に苦しみ抜いた朝鮮民

族の苦悩が、この人によって吐露されていた」と気付いた人がいたであろうか。私もこのときには、すべてを理解することができなかった。

十一 咸興での別れ

咸興に到着すると、保安隊から在住の日本人の家に分散して暮らすように言われ、団長たちは相談してその行先を決めた。まだ接収されずに、そのまま住んでいる邦人の家であった。その家もいつ接収されるか分からなかつた。在住の日本人の多くは、終戦時に強制的に粗末な朝鮮人の家と交換させられていた。掠奪にも遭っていた。私たち家族が世話になった家は、二階建ての大きな家であったが、ここも間もなく接収されることになっていた。二階の座敷を使わせてもらい、お風呂にも入って、羅津を出てから初めての人間らしい生活ができたが、十日ほどでこの家も明け渡しとなった。

私の家族は興南に行くように命令された。八月十日に羅津の家を捨ててから、団長さんを中心に

逃避行を続けてきたが、分散しなければならなくなった。私たちは、団長の冷静な判断力と沈着な行動によって、ここまで無事にたどり着くことができた。そして、博愛と抱擁の心に接して、生きることができたのであるが、とうとう別れる日がきてしまった。

朝鮮は三十八度線を境に、北と南に分断されて南下できなくなると聞いて、不安の中、二日後にほかの団体の人たちと興南に向かって出発した。途中、捕虜となった日本兵の隊列と出会った。日本兵は、ソ連兵の銃でこづかれながら行進していたが、やっと杖にすがって歩く人もいた。「元氣を出して下さい」「頑張ってください」と声を掛けると涙ぐむ人や、うなずく人が通り過ぎて行くと「私は何々村のだれだれです。内地に帰ったら知らせて下さい」と叫んだ日本兵を、ソ連兵は血相を変えて走り寄って、突き倒したのである。悲しい悲しい行進であった。興南に収容された後、ソ連に送られ、その後の強制労働により多くの命が

失われたのである。

十二 興南での抑留生活

興南には、大きな遊郭街があった。その一棟に収容された。三階の和室には、派手で立派な布団があった。夜になると、ソ連兵がジープでやってきた。音がすると、女の人は天井板をはずして逃げ込むのだが、枕の数が合わないで大騒ぎしたというのを聞いて、枕も隠した。ソ連兵のあまりの振る舞いに、たまりかねた日本人の代表がソ連軍の司令部に赴いて、取り締まってほしい旨申し入れたが、取り合ってもらえなかったとのことだった。「日本軍は日露戦争のとき、ロシアの婦女子をおびただしく拉致して強姦したではないか。その上、発見を恐れて殺してしまうという残虐行為をした。我々は決して殺してはしない」確かに皆送り返されて来ていた。黙って引き下がるよりほかなかったと聞いた。

間もなく発疹チフスが蔓延した。北から逃げて来た人たちが入っている、私たちの棟が隔離病棟

になるため、私たちは町はずれにある粗末な遊郭に移った。門を入るとコの字型に部屋があり、内側に外廊下があった。部屋は温突ウツドで窓がないために全く陽が差さず、その上温突に焚く燃料がないので、その寒さは大変なものであった。薪を買って来て部屋の中で燃やすのだが、次第に建物の板がはずされ、灰になった。廊下の片隅にあるトイレは外廊下に行くので、その寒さは厳しいものだった。六畳の部屋に独身の三人との同居が決まったが、実は妻帯者で満鉄の社員であった。父と同様、武装解除され南に向かっていた。彼らは農家などに泊まり込んで働いており、部屋で寝起きすることはほとんどなかった。日ごとに病人が増え、死んでいった。子供の声は全くしなくなつて、年寄りの姿も消えた。家族の泣き叫ぶ声は絶えず、お経をあげてくれたお坊様も亡くなつてしまった。あまりにも死人が多く出るので、保安隊は郊外に溝を深く掘り、そこに死骸を運ぶよう命令した。菰で死体をぐるぐると巻いて荒縄で縛り、

長い棒を通して二人の男が担いで行つた。「地獄とはこんな所を言うのだろう。人間の世界じゃない」と目をつぶつて投げ入れて来た人は、身を震わせていた。

売る物も無くなつて、父はパンやたばこを売りに行つた。パンは仕入れた。葉たばこを刻み紙に巻くのは、母と私の仕事であつた。女の外出は危険で部屋に閉じこもつていたので、外の様子は知らないままに過ぎていった。

一月になつて父が高熱で倒れ、続いて母が倒れたが、幸いなことに弟は元気でした。一時的であつたが二人共意識を無くしていたが、母が先に意識が戻つた。父の床ずれの手当など、教えてもらつて看病した。父がようやく動くようになったとき、私が高熱で倒れてしまった。このとき、病人は病院に収容する旨通知があつた。病院といつても遊郭に収容するだけで、特に手当てなどしなかつたようなので、私を行かせなかつた父に感謝しなければならぬ。同室の男性が、仕事から帰

って来て発熱、意識の無いままに二日後に亡くなってしまった。新婚間もなく別れた、満鉄の社員であった。父と母は彼の手を組ませ、顔を拭いて髪を切り、同郷の人に所持品と共に託したのである。次々と人々は無念の思いを残して死んでいった。食べる物は高粱、玉蜀黍の粉、馬鈴薯、稗、大根葉、すけそう鱈の干物などであった。

十三 興南を脱出

二月に入ると、ソ連軍から一日一人米二合が配給されるようになり、治安も良くなってきた。このころ、三十八度線を突破して、南朝鮮に日本人を運ぶ闇船（漁船）があると聞いて、この米を食べずに売り、やっと一人千円の船賃を用意することができた。乗船が決まったその夜も、この土地に住んでいる人たちが、大きな荷物を持って捕らわれて来た。荷物など何一つ無い死を覚悟した十人余りの人たちが、ひそかに出て暗闇の中海辺まで歩いた。海水の溜まった船底に入ると既に何人かの人がおり、船は直ちに出た。途中監視船に

出合い、シートをかぶせられた私たちは、頭上の板を取る音で生きた心地がしなかった。幸いにも三十八度線を突破できて、その夜は朝鮮人の家に泊めてもらった。

朝になってアメリカ軍の収容施設まで歩き、そこで私たちはアメリカ兵にDDTをふりかけられたり、地下足袋や缶詰などの支給を受けて、その夜はテントの中で久しぶりに安心して寝ることができた。

食べることの心配がなくなって十日ほどが過ぎたころ、沈没を免れた日本の上陸用舟艇が迎えに来て、釜山に向かった。二段三段と仕切られた窮屈な棚のような部屋に詰め込まれたが、かつてはこの船で日本兵たちが敵地に上陸したのかと、胸が痛んだ。船酔いで苦しみ、やっと釜山に着き、大きな倉庫に収容された。なかなか日本に向かう船が来ないので、流言飛語が飛び交った。「日本は、恐ろしい爆弾投下で、草一本生えない焼野原になっているので、外地からの日本人受け入れを

拒んでいるから、船が出ないのだ」皆で不安の日々を送った。

しかし意外にも早く、アメリカ軍の上陸用舟艇が入港して来た。引揚者は、戦車が出入りしたであろう船尾の大きな入口から入り、コンクリートの床に隙間なく座らされた。ここでも母国を目前にして亡くなる人がいた。あちこちですすり泣く声が聞こえ、みな悲しさをこらえてうつむいていた。

十四 母国に上陸

博多港に着いても、すぐには上陸できなかった。コレラの潜伏期間を過ぎるまで、停泊しなければならなかった。朝夕一個充ての玄米のおにぎりに我慢ができず、大騒ぎする南朝鮮からの引揚者を、檻ほろをまとった北朝鮮からの引揚者が黙って見ていた。一週間ほどが経ったところ検疫を済ませて上陸、やっと母国日本の土を踏むことができた。感無量、しばらくは呆然となり、言葉も出ない有様であった。

引揚証明書、衣料切符、一人当たり二百円の現金が支給された。「皆さんの中に、つらく悲しい思いをした女性がおられると思います。お察ししております。決して恥ずかしいことではありません。お申し出下さい」と、繰り返しアナウンスされていた。日本人たちの目前で、裸にして強姦するソ連兵たちや、ジープで連れて行かれた女性たちの姿が脳裡に浮かび、胸が痛くなった。

係員は北朝鮮の引揚者の姿を見て、「今まで何回も各地から引揚船が入りましたが、今度の北朝鮮の方たちは、一番ひどい状態です。苦勞しましたね」と言っ、それ以上言葉にならない様子であった。

倉庫で一夜を明かし、私の家族は、東京で焼け出され市川に住んでいると聞いていた父の長兄を頼って行くことになり、早速、品川行きの引揚列車に乗った。一般の人も乗って来て素早く座席は占有されてしまい、引揚者は通路に座ったままで、だれ一人席を譲ってくれる人はいなかった。途中

の駅の窓越しで「ご苦労様でした」と差し出されるお茶も、この人たちが受け取って、平然と飲んでいった。同胞の絆で母国にたどり着いた私たちには、これらの日本人の姿は大変ショックであった。

品川に着くと、それぞれの宿泊所があてがわれ、私の家族は街の中心にある大きな旅館であった。

ここで銭湯に行き、半年ぶりの入浴で身も心も洗われた思いであった。翌朝、父は市川に長兄の家を訪ねて行ったが、省線電車の中で、引揚証明書と現金をすられてしまった。伯父の家にはしばらくいて、それから住む家が決まるまで、母の実家にお世話になることになって、母と弟と三人は山梨に向かった。そこは当時、明野村と言った農村で、伯父も伯母も従弟たちもやさしく親切であった。

一方、市川では父が住み家を捜していたが決まらず、伯父の家の一間で暮らすことになって、九月に帰って来た。弟は六年生に、私は女学校の一年生に、一年遅れて二学期から就学した。

高校二年生の五月、父は逝き、私は二年後卒業

して千葉銀行に勤めた。このとき、ようやく県営住宅に入居することができたのである。